

第1回議事録

1 概要

会議名	令和8年度 第1回 学校運営協議会
開催日時	令和8年5月22日(金) 午前9時15分から11時15分まで
場所	静岡県立清水特別支援学校 会議室
出席者	外部委員6人 本校職員10人 計16人
目的	学校と保護者及び地域住民等との間の信頼関係を深めるとともに、その権限と責任の下、保護者及び地域住民等の学校の運営への参画、学校運営の改善及び児童生徒の健全育成に取り組むものとする
テーマ	誰もが幸せを感じる学校

2 議事

1 令和8年度第1回学校運営協議会 開会 9時15分

外部委員6名、本校教職員10名、計16名で開会。

- (1) 校長挨拶
- (2) 委員の任命 (任命状の授与)
- (3) 自己紹介 (本校教職員、外部委員)
- (4) 会長・副会長の選出 (規則第14条)

2 校長挨拶 (ビジョンと地域への想い)

「4月に着任いたしました。実は7年前にこの学校に6年間勤務しておりました。久しぶりに戻ってきて改めて実感しているのは、清水のこどもたちは地域の中で本当に温かく育てられているな、ということです。本年度は、教育目標『ともにあゆみ、ともにかがやく』のもと、新たに『誰もが幸せを感じる学校』を柱に据えました。こどもたちが地域に遊び、学び、参加することで、将来この街で自分らしく生きていくための土台を作っていきたい。本日は、地域をよく知る皆様から、こどもたちが社会に飛び出していくためのヒントをたくさん頂ければと思います。」

3 議題1 9時25分～10時05分 (進行：学校運営協議会会長)

※今年度の重点、地域との協働・交流、本年度の新たな取り組みについて説明

(1) 令和8年度学校経営計画と本年度の重点 (校長)

本校は、「ともにあゆみ、ともにかがやく」を教育目標に掲げ、児童生徒が地域で自分らしく生きることを支援しています。令和8年度は、新たに「誰もが幸せを感じる学校」を具現化の柱(中期的目標)に据え、「元気」「笑顔」「貢献」の三つの重点領域で教育活動を展開します。

○ 学校全体の重点目標と取組

学校経営の共通主題を「地域に遊び、学び、参加する」とし、以下の三つの柱で計画を進めます。

【元気】(安全・安心)

危険察知能力の育成や身体を守る習慣づくりを目指します。防災・交通安全の体

験的学習や、日常的な点検による清潔で安全な環境づくりを徹底します。

【笑顔】（専門性）

「AAR サイクル（見通し・行動・振り返り）」、ICT 活用により、対話と深い学びの充実を図ります。

【貢献】（連携）： 交流及び共同学習や地域で学ぶ機会を充実させ、その成果を情報発信します。地域コーディネーター（天野委員）を中心に、地域資源（ヒト・モノ・コト）の発掘と連携の拡大を目指します。

(2) 学部経営計画（各学部主事）

ア 小学部 役割を果たし、人とつながる楽しさを経験する

【元気】「身体づくり」を軸に、手や指の使い方、健康を保つための衛生習慣を学びます。地域の人からラジオ体操や踊り（清水港かっぼれ等）を教わる活動も取り入れます。

【笑顔】 低学年は「やってみたい」という意欲を、中学年は「自分でやろう」とする自立心を、高学年はリーダーとして「誰かのために」動く自信を育みます。

【貢献】 委員会活動や、「FID サッカー教室」、IAI パラスポーツパークでの活動を通じ、主体性とやり取りの楽しさを経験します

イ 中学部 清水のじまんを知り、他者のために活動する

【元気】 社会生活に必要な技能や態度を身に付け、最後までやり遂げる心と体をつくります。

【笑顔】 目標に向かって友達と協力し、成功体験を積み重ねることで自己肯定感を高めます。

【貢献】 「清水のじまん」を題材にした生活単元学習を柱に据えます。

- ・ 地域資源の活用：「お日待ち太鼓」の継続や、学校間交流（袖師中・飯田中）を実施します。
- ・ 花壇ボランティア： 美化委員会と地域住民の協働活動を卒業式の花鉢づくりまで広がります。

ウ 高等部 地域社会で生き生きと暮らす人を目指す

【元気】 自助・共助の精神を高める防災学習や、系統性のある保健学習を実施します。

【笑顔】 「探究」をキーワードに、自ら興味・関心を広げる姿勢を養います。

作業学習の深化： 地域企業（あいネット、JA しみず等）から提供された廃材（ガラス、蝋燭、規格外の果物）を製品化し、やりがいを実感します。天野委員から絶賛された唐辛子のような一級品の開発・発信も期待されています。

【貢献】 地域社会への貢献と発信を強化します。

外部連携：「清水区未来創造トーク」への参加や、清水桜が丘高校との連携（パッケージデザインのアドバイス等）を通じ、学習成果を社会に認められる機会を増やします。

(3) 地域との交流活動（地域連携課長）

①地域連携の現状と教職員の意識

- （教職員アンケートの結果） 昨年度実施したアンケートでは、本校の良さ・強みとして「地域とのつながりがあること」が第1位、「地域の人や場を活用した学びが多いこと」が第2位に挙げられました。
- （地域に根ざした教育） 多くの職員が、地域資源を教育課程の中に位置づけ、生徒が地域の中で成長しているという実感を共有しています。

②令和7年度の地域交流実績

- （交流規模） 年間約50回の活動を実施し、延べ人数にして約200名の地域ボランティアが来校しました。
- （具体的な活動内容）
 - ・遊びボランティアは、飯田地区社会福祉協議会との連携により13年継続しており、昨年度は民生委員も加わって活動の輪が広がっています。
 - ・ゲストティーチャーは、マジックショー、三味線、かっぽれの踊り、ラジオ体操講習会など、地域の方の特技を授業に生かしています。
 - ・防災学習は、地域住民と一緒に避難所設営訓練（簡易ベッド・テント作り）や炊き出し体験を行いました。
 - ・PTA お茶プロジェクトは、近隣のお茶屋（中村米作商店）や茶農家（豊好園）と連携し、茶摘みから和紅茶「おいしすぎて えらい こっちゃ！」のパッケージデザイン・製品化まで、高等部の作業学習とコラボレーションしています。

③学校間交流の推進

- 小学部：飯田東小学校と、歌の披露や運動会種目の共同実施など、同年齢交流を深めています。
- 中学部：袖師中学校や飯田中学校、第五中学校（三保松原清掃）などと、それぞれの学習内容の発表を通じた交流を行っています。
- 高等部：清水南高校との合同コンサートや美術作品の交換展示、清水東高校の文化祭や部活動を通じた交流を実施しました。

（交流籍校との連携）昨年度は小学部の64%（60名）、中学部の29%（17名）が居住地の小中学校との直接・間接交流に参加しました。保護者からは「地域の一員として受け入れられている実感が持てた」との感想が寄せられています。

④情報発信の強化（かがやき発信）

- ・Instagramの開設から1年強で投稿数やフォロワー数が順調に増加しています。
- ・今後の目標として、単なる学校紹介に留まらず、授業の様子や生徒の「輝き」、特別支援教育への理解を広めるための工夫を凝らした発信を継続していきます。

⑤今後の課題と展望

- ・長年関わってくださるボランティアの中には高齢の方も多く、活動を継続していくために、地域の方々と連携して検討を重ねていきたいと考えます。

4 議題2：質疑応答と承認（委員の意見詳細）

※本議題では、令和8年度の学校経営計画案に対し、外部委員の専門的な知見や地域の現状を踏まえた非常に具体的な助言・提案がなされました。

(1) A委員（地域コーディネーター）

人間にはどうしても『向き不向き』があるものです。一律に何かをさせるのではなく、個々の得意なことを見極めるのが大切ですね。まさに山本五十六の言葉通り、『やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ』です。あと、去年のお祭りで販売した作業製品の『唐辛子（鷹の爪）』。あれは一級品ですよ。長野の善光寺の老舗にも負けないクオリティで、本当に激辛でおいしかった。これを貴重な資源として、例えば熊手の守りに入れるとか、ユーモアを交えて地域ブランドとして発信していけば、もっと面白くなると思います。

(2) B委員（学校所在地区連合自治会長）

「私は今回初めて参加しましたが、こちらの報告を聞いて、本校がかなり前からこれほど充実した地域連携をやっていたのかと驚きました。特に飯田地区の社協の皆さんが一生懸命に学校へ足を運び、活動を支えている姿を見て、非常にいいことだなと感じています。今の前向きな方向性で進めていくのが一番だと思います。」

(3) C委員（副会長：スクールカメラマン）

「一般の高校は少子化や再編で、『自分たちの学校がなくなってしまうかもしれない』という強い危機感を持っています。特別支援学校も、今は安定しているかもしれませんが、『ここに来て良かった』と心から思える特色をもっと積極的に発信しないと、いつか足元をすくわれるかもしれません。経営計画にある『幸せを感じる学校』という言葉も、具体的にどう評価して、どんなスケジュールで実現していくのか、ビジョンを明確にする必要がありますね。設立15年経つわけですから、数年先を見据えた中期目標への更新も考えていく時期ではないでしょうか。」

(4) D委員（会長：民間企業有識者）

「目標を立てて終わりにするのではなく、後で振り返りができるポイントを作っておくことが大切です。PDCAサイクルをしっかりと回して、行動計画に落とし込むことが成長の原動力になります。また、最近は通信制高校も知的障害のある子を受け入れ始めており、ある意味で『競合』です。保護者がそちらに流れないように、本校ならではの強みである『現場実習』などの充実したトレーニングを、魅力として強く打ち出していくべきです。」

(5) E委員（行政関係者）：行政と学校を繋ぐ「中間的な橋渡し」

「区役所としては、学校が地域資源を使いたいという時に、住民や関係部署（農政、防災、お茶など）へ繋ぐ『中間的な橋渡し』の役割を担いたいと考えています。例えばお茶の学習なら、新茶の時期である4月から5月に合わせて教室を設定するなど、行政のセクションと連携すればもっと旬で深い学びができるはずです。児童生徒たちが地域に参加することは、行政にとっても人手不足の解消や、若い世代の定着に繋がる力強い取り組み

だと期待しています。」

(6) F 委員（保護者代表）

「静岡市内では自閉・情緒障害の児童生徒が 10 年で 2.4 倍に急増しています。学校が長年蓄積してきた指導データや卒業生の活躍状況は大きな『財産』です。保護者が相談に来た時に即座に応えられるような『プラットフォーム（データバンク）』としての機能を強化してほしいと思います。それと防災についてですが、こどもたちが最終的に帰るのは『自分の住んでいる地域』です。学校だけでなく、居住地での訓練や連携が不可欠です。学校で学んだことが地域での自立に繋がるよう、双方向の連携をお願いしたいです。」

5 おわりに（副校長）

「本日は、地域ブランドの活用から通信制高校との競合という厳しい視点まで、本当に多岐にわたる貴重な御意見をありがとうございました。いただいた御意見は、**生成 AI 等も活用しながら職員でしっかりと共有し、余すことなく今後の学校経営に反映させていきたいと考えております。**本日はありがとうございました。」